現代の父性に関する基礎研究

臨床心理学研究センター 研修員　樫 津 祥 貴

＜問　題＞

現代において、父親役割研究が発展してきた理由には、様々な要因が考えられる。それを大きく分類するとすれば、次の２つの要因が考えられるのではなかろうか。

①「父親の弱体化」といったキーワードで語られる、父親という存在そのものが弱体化してしまったのではないかという懸念。

②現代社会の変化、母親役割の変化などに伴う、父親役割の変化の要請。それに伴う、新しい父親像の提示。

まずは、１.父親の弱体化、２.母親の変化に伴う父親の変化、の項で、この２つの要因によって進められた研究が、現在どのように発展しているのかを概説しようと思う。そして、３.置き去りにされた「母性」と「父性」の項で、そういった役割研究の問題点を指摘しようと思う。

１．父親の弱体化

父親についての理論を最初に強調したのは、S. Freudである。小児が３、４歳頃（いわゆる男根期、もしくはエディプス期）になると、性の区別に目覚め、性器に関心が集中すると共に、異性の親に性的欲望を抱くようになるという。このエディプス・コンプレックスの時期の父親との関わりによって超自我概念が発達する。このS. Freudの理論により、「子どもの道徳性の発達にとって、親、特に父親の持つ厳しさや道徳心のあり方が、極めて重要な意味を持つ」ことが明らかになった（馬場、1984）。

その後の精神分析は、父子関係が生ずる以前の、より早期の母子関係を研究対象とするようになった。その理由について、馬場（1984）は、「治療者の関心が、フロイト時代の神経症から、児童の情緒障害へ、さらに精神病や境界例へと広がって行ったことが考えられる」と述べている。

そして、父親が再び注目されるようになったのは、A. Mitsherlich（1967）が『父親なき社会』で指摘してからのことになる。ここで、A. Mitsherlichが展開した現代社会批判をまとめると次のようなものになる。

かつての父親社会では、息子は父と共に働き、あるいは労働に従事する父の姿を見ることを通して、父の生活実践の方法を学び取ったり、父の価値規範に直接触れて両親を形成したりしてきたのであるが、現代では、父権が弱体化したことと並んで、具体的な父親像が見えがたくなってきているために、息子は同一化の対象を失い、心の発達上大きな困難に直面することになる。このA. Mitsherlichの指摘以後、アメリカでの父親研究の数は飛躍的に増大した。

これ以後、1970年代～1980年代にかけて、「父親再発見の時代」とさえ言われるほどに、研究が進んだアメリカに対して、日本で父親が注目され始めたのはつい最近の話である。最近になり父親が注目されてきた原因は、樋口

（1995）が指摘するとおり、「A. Mitsherlichの唱えた『父親なき社会』をわが国も同様に現在体験している」ということも要因のひとつであろうと考えられる。

このようにして、現代日本においても、「父親の弱体化」はクローズアップされ、その研究は盛んになされるようになって来た。

２．母親の変化に伴う、父親の変化

父親研究が盛んになってきた要因には、もう一つ母親役割の変化が考えられるであろう。母親役割の変化の原因には、次のようなことが考えられる。

医学の進歩による長寿化にともない、子どもだけに生きがいを見出すことが困難になってきたこと。さらに、産業・経済構造の変化によって、女性の就業者が求められ、女性も高学歴化し、社会進出が可能になった。もう一つは、核家族化である。

核家族化現象に伴う共同体の解体は、母親の子育てを孤独なものにしてしまったようである。東山（2002）は、「昔は、子育てにかかわる親は、もっとたくさんいた。出産のときの『トリアゲオヤ』からはじまり、初めての乳をもらう「チオヤ」、名前をつけてもらう『ナヅケオヤ』などは、日本全国、ひろくみられた習わしであった」と述べ、昔の子育てが、いかに共同体の結びつきの中でなされていたかを述べている。現代の母親は、そういった共同体のサポートを獲られない、孤立した状況での子育てを強いられている。

柏木（1993）は、現実問題としてこういった社会的変化があるにも関わらず、「育児は母親の手で…」といったような考えが支配をしていると、「分業型の家族形態における父親不在、母と子の閉塞状況、女性にとっての母親であることと「私」として生きることの葛藤がおこる。そして、それが表面化するのは一方で虐待・子殺し、一方で過保護、母子密着と相反するように見えるが、同じ根を持つ現象である」と述べている。

乳幼児死亡率の低下、長寿命化、産業・経済構造の変化、核家族化。これらは、現代社会に見られる「事実」である。現代社会の「事実」に即してクローズアップされたのが父親役割であった。

父親役割について研究された論文を考察していくと、父親役割の重要さが浮き彫りになる。父役割研究がすすむにつれて、現代社会が求める理想的な父役割像が明らかになってきた。それは大きく分けて次の２つであると考えられる。

①子どもの社会化を促す父親

②家事、育児に協力し、母親のストレスを軽減させる父親

①に関しては、１.父親の弱体化で述べたとおり、S. Freud以来、エディプス・コンプレックスとの関連によって、常に指摘されてきたことである。

前述したような多くの研究が、３、４歳頃からの父親の役割の重要性をクローズアップした。しかし反面、「それは乳幼児期には、父－子関係は存在せず、母親が専ら子どもの関係対象であることを前提する。父親は“遅れてやってくる二次的存在”であるとし、父親は外で働き母親が子育ての責任を負うという家族形態の中での伝統的な父親像を合理化した」（柏木，1993）という見かたもある。しかし、前述したような現代の社会構造の変化に伴い、家族形態も変化している。そういった状況の中で注目されてきたのが、②家事、育児に協力し、母親のストレスを軽減させる父親、である。

牧野ら（1985）は父親の家事育児についての分担意識や参加状況を母親自身が好意的に受け止めていると、母親の育児不安が低いということを示している。尾形ら（2000）によると、父親と子ども・妻とのコミュニケーション、家

事への援助といった行動は、子どもの共感性に影響を与えるということが述べられている。また、平山（2001）の中学生を対象とした調査によると、「神経症傾向が最も高いのは、父親が自身の家庭関与を高いと自己評価しているのに対し、母親は逆に父親の関与を低いと見ている場合で」ある。さらに「これは、父親評定、母親評定共に一致して父親の家庭関与を低く評価している群よりも、中学生の神経症傾向が高いことを意味している」と述べている。こういった一連の研究は、父親が、母親の家事・育児をサポートすることによって、母親のストレスを軽減し、ひいては子どもにもポジティブな影響を与えるということを証明している。

父親役割研究が盛んになるにつれて、子どもの社会化を促す父親役割だけでなく、家事・育児に協力し、母親のストレスを軽減させる父親像も次第に広く一般に浸透してきたようである。

3．置き去りにされた「母性」と「父性」

ここまで、父親研究の現状を概説してきた。しかし、このように父親研究を振り返ってみると、その研究対象は「役割」に向けられ、「母性」・「父性」という問題については置き去りにされてきたように思える。

越ら（1991）は、生後6ヶ月から生後12ヶ月の乳児を持つ母親を対象に、母親の育児不安と父親の育児協力との関連を研究している。それによると、育児は母親がするものであるという「母親主導」の考え方をしている母親は、父親の協力度が高いほど育児不安が高いという、前述したような通説とは対立する結果を示している。考察において、越らは、「自分の育児行動が不十分なために、父親の協力度が高くなっていると考え、その結果として、自分の育児行動に自信を持てなくなるため、育児不安が高くなるのではないかと思われる」と述べている。また、同じ論文において、父親の育児協力に対して、母親がどのように評価をしているかも研究されている。その結果は、父親の協力度が低いほど肯定的な評価を得ていることが示された。このことについて、「父親の協力度が高いということは、父親と子どもの接触が多いということであり、このことが逆に、母親に子どもと自分との関係を阻害されると感じさせる。そのため、父親の協力度が高いほど不満であり低いほど満足であるのではないか」と越らは考察している。この結果は、母親役割の背後にある母性の影響を示唆する研究であると言えないだろうか。

正高（2002）は、父親が子どもの育児に時間を費やす程度と、攻撃性の高い子どもの出現率を比較した。その結果、攻撃性の高い子どもの出現率は、父親が育児に費やす時間が多い家庭でも、少ない家庭でも差がないことを報告している。一方、父親と子どものコミュニケーションが少ない家庭においては、攻撃性の高い子どもの出現率は高く、コミュニケーションが多い家庭においては、攻撃性の高い子どもの出現率は低いことも報告している。このことから正高は、「一時期に比べて、父親が子どもの養育に熱心に向かうようになったかもしれない。だがそれは、家庭に母親が二人誕生したという事態に過ぎない。それは子どもにとって、母親が一人の時より、安全基地に留まって闇へ出るのをためらう態度に拍車をかける傾向をもたらしかねない」と述べている。

前述したとおり、現代社会構造の変化による、女性（母親）の意識の変化。それに伴う母親役割と父親役割の変化は必然である。子どもが産まれたときから、父親も積極的に育児に関わるという姿勢は現代社会にとっては望ましいことであり、また広く一般化しつつある。しかし、育児に関わるということを免罪符にして、父性の発揮をおろそかにしていては、最初に述べたキーワード、『父親の弱体化』はかわらず

叫び続けられることとなるように思われる。「第二の母親」を誕生させないために、我々は父性というものをもう一度しっかりと見つめる必要がある。さもないと、父親役割研究のすばらしい成果は、「第二の母親」を誕生させてしまうという誤った認識を促してしまう危険性があるのではないだろうか。

4.「父性」とは

それでは、父性とは何なのであろうか。そもそも、母親が一般に子どもを産んだ女のことであり、母子関係は生物学的にも明瞭であるのに対し、父親はそうではない。綾部（1995）は、「父親というのは、人類社会発達史の中では、社会の『制度』として、人類史のはるか後期になって出現したものである」と述べている。さらに「…したがって父親ないしは父性の出現は、男女の性的な結びつきが制度化され、当該文化の婚姻慣習として固定化したときに初めて確認されるものだといえよう」とも述べている。つまり、父親というのは、社会的な存在ということであり、その社会の在り方によって変化するものであるといえるだろう。

日本にも歴史的に最近、社会が大きく転換した時期があった。第二次世界大戦にともなう家族法の改正。家父長制の解体である。家父長制の解体は、「制度」としての父親の機能を解体してしまった。さらに、「男女雇用機会均等法の成立は、日本的ジェンダーに更なる制度的インパクトを与え、結果として家庭内における家父長的「父性」の影を一段と薄いものにする働きを伴った」（綾部、1995）。さらに、戦後民主主義教育は、「父親が権威的になることを戒め、子どもに「理解のある」父親として、友人のように子どものように接することを求めた」（河合、1982）。つまり父親は、「制度」という鎧をまとうことによって、父性を発揮することができる。その「制度」の鎧がはがされてしまったのが、現代の日本の父親と考えられる。

このように論を進めていくと、あることに気づかされる。それは、衰退したのは父性を支えていた「制度」であって、父性ではないということである。言い換えれば、父性は現代においても厳然と存在する。河合（1972）が述べたように、日本は母性社会であるために、その存在が認められにくいが、河合（1982）は「欧米との比較において、日本はむしろ母性社会と言うべきであるが、アジア、アフリカ諸国なども考慮に入れるとき、日本は（母性と父性の）不思議な中間状態にあると言うべきである」とも述べている。

我々が考えなければならないのは、現行の「制度」の上で、父性を発揮する方法である。社会全体としてみたとき、現行の「制度」によって父性を発揮するのは困難なことのように思われる。前述したとおり、現代社会の「制度」は父性を発揮しにくい方向へ改革された。注目するべきなのは、家族という「制度」でのあり方である。社会をモデルとしない、家族ごとの父性・母性のバランスこそが重要となると思うのである。

そこで、筆者は本論文において、その基礎研究として、現代の家族における、父性を研究したいと考えた。ここでいう父性とは、父親にはもちろん母親にも存在するものと定義する。なぜなら、前述してきたように、父性が「制度」の枠組みから生まれるものだとしたら、父親も母親もこの社会の制度下にいるのは同様であり、この論理から言えば母親にも父性は存在する。それでは、父親に母性はあるだろうか。本論文では、理論上父親の母性というものを仮定しているが、母性が生物学的な基盤を持つものである以上、その立証は困難である。本論文では、そのことについての考察も行いたい。

さて、このような研究において、父性というものを捉えるにはどうしたらいいだろうか。例

えば、「子どもに社会化を促す」という。「社会と家庭とをつなぐ」ともいう。しかし、それらは全て「父役割」である。「父性」は（「母性」にも言えることだが）、理論化したとたん、「父役割」に変化してしまう。父性とはイメージとしてしか語れない。河合（1976）は父性を「切断する」と言い、母性を「包含する」と言った。それはイメージである。ちなみに、本論文でいう「イメージ」とは、人が心の中に抱く絵のようなものを言い、視覚的なものに限らず、五感それぞれに、またはそれらの統合されたものとして存在する同様のものをいう。本論文では、「父親イメージ」「母親イメージ」を使用して、父性の重要性を検証したいと思う。

また、今回は男子の場合の父性の内在化にのみ注目し、女子の場合は、また別の機会があれば考察を加えたいと思う。なぜなら、異なる発達過程を考慮する必要があるからである。

＜目　的＞

本論文では、イメージを用いて、男子高校生及びその両親の被検者の父親イメージと母親イメージを測定し、現代の父性を検討する。

＜仮説１＞父性と母性は、男性、女性の区別なく両方が存在している。

＜仮説２＞被検者の父が父性を発揮し、被検者の母が母性を発揮したほうが、その被検者にとって理想的なかたちで、父性と母性が内在化される。

＜仮説３＞被検者の持つ「父性イメージ」「母性イメージ」は、被検者の父母の「自分イメージ」の影響を受けている。

＜方　法＞

１．質問紙

質問紙は、吉田（1995）の作成した、「母性－父性尺度」の一部を抜粋したものを使用した。

吉田の母性－父性尺度は、山口（1985）の尺度の改訂版であり、以下の項目からなる。母性の肯定的側面（MOP：MOther Positive）、母性の否定的側面（MON：MOther Negative）、父性の肯定的側面（FAP：FAther Positive）、父性の否定的側面（FAN：FAther Negative）、女性性の肯定的側面（FEP：FEminine Positive）、女性性の否定的側面（FEN：FEminine Negative）、男性性の肯定的側面（MAP：MAsculine Positive）、男性性の否定的側面（MAN：MAsculine Negative）について、各９項目、合計72項目である。回答尺度は７件法である。

筆者の研究は、母性－父性のイメージに限ったものであるので、吉田の尺度の中から、MOP、MON、FAP、FAN、の４つの側面。各９項目、合計36項目を抜粋し、それを母性－父性尺度として使用した。理論上とりうる得点は36～252点となる。

２．被検者と実施方法

被検者は、京都市内の高校の男子高校生180名とその両親。調査期間は、2002年９月～10月である。高校生本人と、その高校生の父親と母親の両方に母性－父性尺度を実施した。

高校生用、母親用、父親用の質問紙とも匿名である。高校生に対する教示は、「あなたが思うお父さん、お母さんのイメージはどのようなものでしょうか？ この質問紙に書いてある項目でどれほど当てはまるか丸をつけていってください。正解はありませんので、直感で思ったものにどんどん丸をつけていってください。注意してほしいのは、ここでいう『お父さん』『お母さん』というのは、あなたがたの本当の『お父さん』『お母さん』のイメージではありません。あなたの中にある母親というもの、父親というものに対するイメージです」とし、高校生自身に内在化されている父親像・母親像である

ことに注意を促した。高校生に施行した母性－父性尺度は、同様の尺度項目を「父親イメージ」と「母親イメージ」の２通りで回答してもらったので、項目数は、合計72項目となる。

一方、両親に行った母性－父性尺度は、その教示を「自分自身のイメージにどれくらいあてはまるか」とし、自分自身のイメージを回答してもらった。

＜結果と考察＞

実施した180名のうち、152名から回答を得た(回収率84.4%)。そのうち、回答に空欄があるもの。白紙で提出されているもの。全てが同一の尺度に丸がつけてあるものなどを除外すると、138名となる（有効回答率76.6%)。

本論文では結果と考察の記述を、１.因子分析、２.平均値、３.相関、の順で行ない被検者全体の傾向を述べる。

１．因子分析

まず、高校生の「父親イメージ」の36項目の相関行列の固有値を求めた結果、固有値1.00以上の４因子が抽出された。そこで、因子数を４にして主因子法を適用し、因子付加量を求めた。そのままでは解釈が困難なので，単純構造を得るためにVarimax法による因子軸の回転を行い、４因子を得た。その結果から、因子負荷量が.4に満たない項目、「盲目的な」と、.4以上の因子負荷量が２因子にわたる項目「甘やかす」を削除し、前述と同様の手続きでもう一度因子分析を行った。その結果をTable 1-1に示す。

吉田（1995）の質問項目との対比から、第１因子は「父性の否定的側面」を表している因子（以下FAN：Father Negative）と解釈した。第２因子は「母性の肯定的側面」をあらわしている因子（以下MOP：Mother Positive）と解釈した。第３因子は「父性の肯定的側面」を表している因子（以下FAP：Father Positive）と解釈した。第４因子は「母性の否定的側面」を表している因子（以下MON：Mother Negative）と解釈した。それぞれの因子の信頼性係数は、第１因子（α = .943)、第２因子（α = .916)、第３因子（α = .922)、第４因子（α = .815）であった。

注目すべきは、吉田（1995）が分類した因

Table 1-1　高校生の「父親イメージ」の因子構造
(Varimax回転後)

	因子１	因子２	因子３	因子４	共通性
独裁的な	.901				.844
横暴な	.821				.708
威圧的な	.803				.696
上から押さえつける	.800				.691
厳格すぎる	.780				.728
偉そうにする	.777				.658
支配的な	.729				.717
ワンマンの	.703				.652
頑固な	.667				.469
包み込むような		.867			.804
ぬくもりのある		.825			.780
あたたかい		.804			.789
育てはぐくむ		.778			.715
慈悲深い		.750			.617
豊かな		.729			.683
家庭的な		.678			.545
保護的な		.652			.511
自己犠牲的な		.583.			.402
溺愛する		.484			.405
過保護な		.403			.402
権威のある			.811		.756
威厳のある			.802		.754
厳しさのある			.800		.741
一家を支える			.793		.662
ゆるぎない			.771		.678
頼りがいのある			.742		.669
岩のようにどっしりとした			.623		.547
指導的な			.580		.407
物事に動じない			.533		.390
おせっかいな				.814	.686
口うるさい				.665	.499
過干渉の				.615	.456
束縛する				.612	.519
呑みこむような				.530	.400
固有値	6.365	6.049	5.675	2.714	
寄与率(%)	18.72	17.79	16.69	7.98	

子とは異なった因子に分類された項目である。「溺愛する」と「過保護な」は、本来MONに分類されるはずであるが、本研究ではMOPに分類されている。この項目の揺れについては、後に考察を加えたいと思う。

本論文では、父親、母親の両方とも、それぞれ父性と母性を併せ持つという仮定に基づいて書かれており、さらにその父性と母性にそれぞれ、肯定的側面と否定的側面を定義しているので、論文中の記述がやや複雑となる傾向がある。そこで、結果の記述からは少し離れて、ここでまとめて本論文で使用されている語句の定義について述べたいと思う。

①まず、FAP、FAN、MOP、MONの4因子が、父性と母性を細分化した結果、本論文で用いられる最小の単位となる。その前に、「父親の」「母親の」をつけることで、その因子がどちらの親のイメージがもつ因子なのかを記述するようにしている。

②そして、この4因子の、肯定的側面と否定的側面を総合したものが、「父性イメージ（FAP + FAN）」「母性イメージ（MOP + MON）」であると考える。これも、「父親の」「母親の」を前につけることで、どちらの親の「父性イメージ（または母性イメージ）」なのかを記述する。

③その他、「父親イメージ」「母親イメージ」と記述してある場合は、前者は、「父親の父性イメージ」と「父親の母性イメージ」を総合したもの。後者は、「母親の父性イメージ」と「母親の母性イメージ」を総合したもの、と考える。

④「自分イメージ」という記述が後に見られるが、これは父親自身（もしくは母親自身）が自分の父性・母性を評定した項目を述べるときに使用される。したがって、これも前述までと同様に、「父性イメージ」「母性イメージ」に細分化され、さらに細分化されたときの最小の単位は、FAP、FAN、MOP、MONの4因子である。また、前に「父親の」「母親の」をつけることで、どちらの親の「自分イメージ」なのかを記述するのも、同様である。それでは、結果の記述に戻る。

次に、高校生の「母親イメージ」の因子分析を行い、4因子を得た。手法は、高校生の「父親イメージ」の因子分析と同様なので省略する。その結果から、因子負荷量が.4に満たない項目、「自己犠牲的な」と、.4以上の因子負荷量が2因子にわたる項目「束縛する」を削除し、前述と同様の手続きでもう一度因子分析を行なった。その結果をTable 1-2に示す。

吉田（1995）の質問項目との対比から、第1因子はFANと解釈した。第2因子はMOPと解釈した。第3因子はFAPと解釈した。第4因子はMONと解釈した。それぞれの因子の信頼性係数は、第1因子（α = .916）、第2因子（α = .913）、第3因子（α = .876）、第4因子（α = .770）であった。

ここでも、吉田（1995）の分類とは異なった因子に分類されている項目が散見される。「口うるさい」は、本来MONに分類されるはずであるが、本研究ではFANに分類されている。このことから、Table 1-1の結果も合わせて、次のようなことがいえるのではないだろうか。

まず、特徴的であるといえるのは、FAPの揺るぎなさであろう。高校生の「父親イメージ」、高校生の「母親イメージ」にわたり、一つの項目も欠けることなく、また、他の因子の項目が入ることもなく、9項目が存在している。

これは、父性の肯定的な側面に関して言えば、確固としたイメージができているということができるだろう。加えて、高校生の「父親イメージ」を見ると、FANに関しても、9項目が確立されている。さらに、高校生の「母親の母性イメージ」を見ると、本来MONに分類されるはずの「口うるさい」はFANに分類され、

Table 1-2　高校生の「母親イメージ」の因子構造（Varimax回転後）

	因子１	因子２	因子３	因子４	共通性
独裁的な	.896				.823
偉そうにする	.860				.756
横暴な	.820				.711
厳格すぎる	.735				.605
上から押さえつける	.732				.603
ワンマンの	.723				.570
頑固な	.696				.606
威圧的な	.635				.595
支配的な	.634				.729
口うるさい	.477				.316
あたたかい		.846			.781
ぬくもりのある		.823			.746
慈悲深い		.762			.638
包み込むような		.733			.588
育てはぐくむ		.678			.611
保護的な		.651			.519
家庭的な		.634			.452
豊かな		.597			.532
威厳のある			.744		.635
岩のようにどっしりとした			.683		.512
権威のある			.668		.585
頼りがいのある			.667		.642
一家を支える			.665		.443
指導的な			.598		.472
ゆるぎない			.565		.414
物事に動じない			.553		.490
厳しさのある			.531		.481
甘やかす				.610	.469
過保護な				.604	.415
盲目的な				.520	.494
おせっかいな				.493	.498
過干渉の				.498	.426
溺愛する				.488	.562
呑みこむような				.436	.455
固有値	6.468	5.179	4.703	2.797	
寄与率(%)	17.97	14.39	13.06	7.77	

MOPである「自己犠牲的な」とMONである「束縛する」が削除されているものの、母親の「母性イメージ」は他因子の浸食を受けることなく存在している。このことから、被検者の高校生にも、父親の「父性イメージ」と母親の「母性イメージ」は、ある程度ステレオタイプな、我々にも馴染み深いかたちで確立されているといえるであろう。Jung,C.G.が元型という概念で説明した、母親のグレートマザーのイメージも明確であるし、「制度」によって確立された父性も未だ健在である。

さて一方で、父親の「母性イメージ」、母親の「父性イメージ」を見ると、その項目にかすかな揺らぎが見られる。母親のFANには、本来MONの項目「口うるさい」が入っている。これは、父性の否定的側面から、母性の否定的側面への移行であり、母親が父性を発揮しようとする時、母性の要素が入り込んでしまうという要因は大いに考えられることである。しかし、父親のMOPには、本来MONの項目であるはずの「溺愛する」「過保護な」といった項目が入り込む。これは、母性の否定的側面から、母性の肯定的側面への転倒であり、父親の「母性イメージ」を認知しようとするときの混乱として捉えることが出来るのではないだろうか。

次に、高校生の両親に施行した、母性－父性尺度の尺度項目、それぞれ36項目に対する因子分析を行い、４因子を得た。まずは、父親の「自分イメージ」の因子分析を行った。その結果をTable 2-1に示す。

吉田（1995）の質問項目との対比から、第１因子はFAPと解釈した。第２因子はFANと解釈した。第３因子はMOPと解釈した。第４因子はMONと解釈した。それぞれの因子の信頼性係数は、第１因子（α = .934）、第２因子（α = .922）、第３因子（α = .881）、第４因子（α = .770）であった。ここでも、吉田（1995）の結果と同じ因子として抽出されなかった尺度項目がみられる。FAN因子である「束縛する」「おせっかいな」「口うるさい」「過保護な」「甘やかす」は、吉田の因子では全てMONに分類される。また、MON因子である「育てはぐくむ」「自己犠牲的な」「保護的な」は、吉田の因子では全てMOPに分類される。

次に、母親の「自分イメージ」の36項目の因子分析を行い、４因子を得た。その結果から、

Table 2-1　父親の「自分イメージ」の因子構造（Varimax回転後）

	因子１	因子２	因子３	因子４	共通性
権威のある	.822				.806
威厳のある	.848				.766
指導的な	.827				.774
一家を支える	.792				.663
頼りがいのある	.768				.783
厳しさのある	.758				.703
岩のようにどっしりとした	.733				.630
ゆるぎない	.632				.502
物事に動じない	.526				.420
横暴な		.797			.716
上から押さえつける		.771			.673
偉そうにする		.763			.627
独裁的な		.732			.686
束縛する		.673			.515
威圧的な		.664			.718
厳格すぎる		.654			.659
おせっかいな		.635			.537
ワンマンの		.625			.606
支配的な		.851			.667
口うるさい		.580			.373
過保護な		.566			.664
頑固な		.498			.510
甘やかす		.474			.436
ぬくもりのある			.812		.754
あたたかい			.811		.751
豊かな			.722		.580
家庭的な			.623		.527
包み込むような			.600		.613
慈悲深い			.544		.460
溺愛する				.606	.513
呑みこむような				.600	.391
育てはぐくむ				.556	.579
盲目的な				.555	.417
自己犠牲的な				.548	.386
過干渉の				.483	.425
保護的な				.405	.213
固有値	6.99	6.68	4.14	3.23	
寄与率	19.42	18.54	11.51	8.99	

因子負荷量が.4に満たない項目である「口うるさい」「呑み込むような」「保護的な」と、.4以上の因子負荷量が２因子にわたる項目である「支配的な」を削除し、前述と同様との手続きでもう一度因子分析を行った。その結果をTable 2-2に示す。

吉田（1995）の質問項目との対比から、第１因子はFAPと解釈した。第２因子はFANと解釈した。第３因子はMOPと解釈した。第４因子はMONと解釈した。それぞれの因子の信頼性係数は、第１因子（α = .931）、第２因子（α = .901）、第３因子（α = .863）、第４因子（α = .840）であった。

母親の「自分イメージ」において、残された因子は吉田の因子と全て同様のものである。こ

Table 2-2　高校生の「母親イメージ」の因子構造（Varimax回転後）

	因子１	因子２	因子３	因子４	共通性
ワンマンの	.816				.737
独裁的な	.809				.756
偉そうにする	.806				.785
横暴な	.789				.693
上から押さえつける	.777				.690
威圧的な	.730				.613
厳格すぎる	.661				.506
頑固な	.629				.409
威厳のある		.824			.801
物事に動じない		.790			.627
ゆるぎない		.789			.629
頼りがいのある		.683			.517
指導的な		.677			.576
岩のようにどっしりとした		.631			.523
権威のある		.577			.506
一家を支える		.526			.440
厳しさのある		.462			.390
ぬくもりのある			.775		.689
あたたかい			.762		.647
慈悲深い			.718		.550
豊かな			.654		.524
家庭的な			.629		.420
包み込むような			.625		.451
育てはぐくむ			.545		.496
自己犠牲的な			.463		.538
溺愛する				.790	.669
過保護な				.733	.579
過干渉の				.667	.537
盲目的な				.651	.477
甘やかす				.605	.533
束縛する				.587	.571
おせっかいな				.487	.452
固有値	5.65	4.79	4.14	3.45	
寄与率	17.67	14.96	12.93	10.78	

のことから、Table 2-1の結果も踏まえて次のようなことがいえるだろう。

母親の「自分イメージ」に関して言えば、４項目が削除されているものの、FAP、FAN、MOP、MONそれぞれの因子に、他の因子が混ざることなく確立している。本調査では、両親に対する質問紙は「自分イメージ」を回答してもらっている。このことから、母親は父性・母性を明確にイメージして発揮していると言えるであろう。

一方、父親の「自分イメージ」をみると、その混乱が見てとれる。FANには、５項目ものMON項目が入り込んでいる。このことから浮かび上がってくる現代の父親像とは、母役割の分担が父親にも求められ、父役割を父性と分けて考えることが出来なかったために、自分の父性を混乱させてしまっている父親である。

さらには、MONには２項目のMOPが入り、Table 1-1で示した高校生の「父親イメージ」と同様に、母性の否定的側面から、母性の肯定的側面への転倒を示してしまっている。前述したTable 1-1の高校生の「父親の母性イメージ」においても、肯定的側面に否定的側面が入り込む転倒が見られた。このことから、男性にとって、「父親の母性」というものを確立することは、非常に難しいということが証明されている。問題でも述べたとおり、母親の母性というものは生物学的な基盤を持つものなので、そういった生物学的なつながりを持たない父親に母性を確立することは困難なのかもしれない。

２．平均値

この因子分析結果をもとに、高校生全体のFAP、FAN、MOP、MONごとの平均値を求めた。ただし、本論文の因子分析結果では、FAP、FAN、MOP、MONの４因子にそれぞれ含まれる項目数が異なってしまったために、平均値から項目ごとの比較を行うことはできない。つまり、父親の「自分のFAP」（項目数９）の被検者全体の平均値が37.47で、父親の「自分のFAN」（項目数14）の被検者全体の平均値が40.88であるからといって、父親の「自分のFAN」の値のほうが高いとはいえないのである。

したがって本論文では、ある項目の値を他の項目と比較せずに高いか低いかを決定するための基準として、質問紙の理論上の中央値を設定する。これは、統計的に厳密な中央値ではなく、仮に質問紙の全ての項目に４（どちらともいえない）で回答した場合、その因子がとりうる理論上の中央値である。例えば、父親の「自分のFAN」は項目数が14なので、求められる理論上の中央値は56となる。同様に被検者全体の高校生の「父親イメージ」、高校生の「母親イメージ」において、その因子ごとに理論上の中央値を求め、それぞれについて１つの条件の平均値と定数とのｔ検定を行った。その結果をTable 3-1に示す。この結果から本論文では以下のように定義する。①ｔ値に有意差が見られ、平均値が理論上の中央値よりも高い場合、その値は「高い」とする。②ｔ値に有意差が見られ、平均値が理論上の中央値よりも低い場合、その値は「低い」とする。③ｔ値に有意差が見られなかった場合、その値は「並である」とする。

この、高校生の「父親イメージ」「母親イメージ」の結果からはどのようなことが言えるだろうか。Table 3-1をみると、父親のMONが高く評価され、母親のMOPが並に評価されている以外、全て低く評価されている。この結果は、「父性イメージ」「母性イメージ」のくくりで見るとさらに顕著で、父親・母親ともに低いイメージであることがわかる。t値から考えるに、父親・母親ともに父性イメージが特に低い。実際に、父親になっていないということを考慮に入れるとしても、父性イメージというものが殆ど内在化されていないことが伺える。この結果を、前述の因子分析の考察と合わせて考

Table 3-1　高校生のイメージ項目の平均値並びに理論上の中央値とのt検定結果

被検者（n＝138）

	項目数	理論上のMe	平均値	SD	t値
生徒の「父親の父性イメージ」	18	72	59.28	14.04	−10.483**
生徒の「父親の母性イメージ」	16	64	61.53	10.10	−2.829**
生徒の「母親の父性イメージ」	19	76	62.44	14.99	−10.473**
生徒の「母親の母性イメージ」	15	60	56.28	10.00	−4.302**
生徒の「父親のFAP」	9	36	34.27	7.84	−2.587*
生徒の「父親のFAN」	9	36	25.04	10.57	−11.923**
生徒の「父親のMOP」	11	44	39.83	8.09	−5.961**
生徒の「父親のMON」	5	20	21.77	5.87	3.578**
生徒の「母親のFAP」	9	36	33.54	8.08	−3.549**
生徒の「母親のFAN」	10	40	28.92	11.75	−10.832**
生徒の「母親のMOP」	8	32	32.73	7.05	1.141
生徒の「母親のMON」	7	28	23.61	5.87	−8.622**

*＝.01＜p＜.05,　**＝p＜.01を示す

えると、現代の青年は父性を認知しているが、内在化はしていないといえるだろう。昨今よく言われる「父性の喪失」という言葉は、現代の父親にではなくて、現代の青年にこそ当てはまる言葉ではないだろうか。

それでは、両親の「自分イメージ」はどのような傾向を示すだろうか。高校生のイメージ項目の平均値を求めたのと同様の手順で、両親の「自分イメージ」の因子ごとに平均値を求め、理論上の中央値とのt検定を行った。その結果をTable 3-2に示す。

Table 3-2の結果から、現代の父母が、自分のイメージとしてどれだけ父性・母性を意識しているのかを考察する。理論上の中央値との比較において自分で高いと評価している因子は、父親・母親の「自分のMOP」だけであった。後は父親の「自分のFAP」が並として評価されているだけで、その他の因子は全て低く評価されている。この結果は、母性社会と言われる日本の特質を如実に反映しているのではないだろうか。大いなる母性に支えられて、程よく父性を発揮する。東山（2002）が「父系・母性社会の国」と言い、河合（1998）が「母性原理を血縁によってつくりあげず、むしろその中に父性原理をある程度入れ込む形を持っていた」と述べたような日本の特質が良く表されていると言える。

Table 3-2　両親のイメージ項目の平均値並びに理論上の中央値とのt検定結果

被検者（n＝108）

	項目数	理論上のMe	平均値	SD	t値
父親の「自分のFAP」	9	36	37.47	9.38	1.405
父親の「自分のFAN」	14	56	40.88	13.34	-10.635**
父親の「自分のMOP」	6	24	25.01	5.16	2.015*
父親の「自分のMON」	7	28	24.25	4.56	-9.507**
母親の「自分のFAP」	9	36	32.97	7.28	-4.236**
母親の「自分のFAN」	8	32	18.52	8.21	-18.901**
母親の「自分のMOP」	8	32	35.51	5.18	7.026**
母親の「自分のMON」	7	28	23.11	6.76	-7.169**

*＝.01＜p＜.05,　**＝p＜.01を示す

３．相　関

Table 3-1で見られた、青年が「父性イメージ」を何故内在化できないかという問題には、様々な要因が考えられるだろうが、父・母の影響ももちろんその一つであると考える。本論文では、それは仮説の一つであり、それを検証するための結果がTable 4である。父親の「自分イメージ」、母親の「自分イメージ」が、高校生の「父親イメージ」と「母親イメージ」に影響を与えるかを検証するために、被検者全体の平均値において、Pearsonの積率相関係数を求めた。

本論文では、相関係数が.2から.4までのものを「弱い相関がある」、.4から.7までのものを「比較的強い相関がある」、.7から1.00までのものを「強い相関がある」と定義する。

この結果をみると、高校生の「父性イメージ」「母性イメージ」に影響を与える両親の「父性イメージ」「母性イメージ」が父・母異なった形で、しかも明確な形でパターン化されている。

つまり、母親のFAP、FAN、MOPは、高校生のFAP、FAN、MOPにそれぞれ対応して影響を与える。これは高校生の「父親・母親イメージ」ともに言えることである。そして、高校生のMONに影響を与えるのは、母親のMONではなく、FANである。さらに高校生の父親・母親のFAPには母親のFAPだけでなく、MOPも重要な影響を与え、母親のMONは、高校生の「父親・母親イメージ」には影響を与えない。

一方、父親の場合、MONは高校生の「父親・母親イメージ」全般に影響を与えている。そして、父親のFAPは、高校生の「父親・母親イメージ」の否定的な側面のみに影響を与えるのである。

つまり、両親の「自分イメージ」は、高校生の「父親・母親イメージ」との一対一の対応関係があるわけではないことがわかる。例えば、生徒の「父親のFAP」に影響を与えている両親の「自分イメージ」を見ると、父親のMOP、母親のFAP、母親のMOPがそれぞれ影響を与えており、むしろ父親のFAPはその子どもに影響を与えていないのである。「父親の父性は、子どもの父性に影響を与える」といった画一的な捉え方ではなく、父親も母親も、母性も父性もイメージとして混ざり合い、その子どもに影響を与えるのだと捉える必要があるだろう。

次に、それぞれの両親の「自分イメージ」が、高校生の「父親・母親イメージ」の中のどの因子に影響を与えているかを個別に見ていくことにする。母親の「自分イメージ」と高校生の「父親・母親イメージ」との関係性については、比較的直接的な関係性が見られる。母子密着の関係が見られやすい日本においては、子どもは、父親より母親の母性・父性イメージをそ

Table 4　両親の「自分イメージ」と高校生の「父親イメージ」「母親イメージ」との相関

	生徒の「父親のFAP」	生徒の「父親のFAN」	生徒の「父親のMOP」	生徒の「父親のMON」	生徒の「母親のFAP」	生徒の「母親のFAN」	生徒の「母親のMOP」	生徒の「母親のMON」
父親の「自分のFAP」	−.080	.244*	.055	.253*	−.069	.248*	.033	.308*
父親の「自分のFAN」	.019	.086	.002	.059	.028	.088	−.008	.025
父親の「自分のMOP」	−.040	−.019	.061	−.036	−.048	−.009	.083	.020
父親の「自分のMON」	.246*	.308*	.534**	.657**	.238*	.317*	.427**	.824+
母親の「自分のFAP」	.435**	.117	.152	−.050	.426**	.127	.133	−.083
母親の「自分のFAN」	.058	.987+	−.223*	.565**	.012	.980+	−.257*	.364*
母親の「自分のMOP」	.317*	.051	.243*	.118	.318*	.068	.257*	.145
母親の「自分のMON」	−.014	−.093	−.012	.089	−.012	−.082	−.034	.115

*＝弱い相関あり，**＝比較的強い相関あり，＋＝強い相関あり

のまま取り入れやすいのだろう。そして、父性の肯定的側面の取り入れについては、母親の父性・母性両方の肯定的側面を加味して行われる。ここで思い出されるのは、土居（1971）の「甘え理論」である。土井は、S. Freudが述べたようなエディプス・コンプレックスによる超自我発達という概念は、わが国においては見えにくいのではないかと述べている。その通りの結果が、本論文においても見られた。

しかし、父親の「自分イメージ」と高校生の「父親・母親イメージ」との関係性については、直接的な関係性はみられない。FAPは、高校生の「父親・母親イメージ」の否定的側面にのみ影響を与え、MONだけが高校生の「父親・母親イメージ」全てに影響を与えている。父親のMONが高くなれば、それだけ高校生の「父親・母親イメージ」も強く内在化されることになる。これは、母親のMONが逆に高校生の「父親・母親イメージ」に全く影響を与えないこととあわせて、興味深い結果であるといえる。

本論文での母性の否定的側面（MON）は、父親の「自分イメージ」と母親の「自分イメージ」では異なるということに注意が必要であろう。Table 2-1をみると父親の「自分イメージ」におけるMONは「溺愛する」「呑み込むような」「育てはぐくむ」「盲目的な」「自己犠牲的な」「過干渉の」「保護的な」の7項目。価値観の転倒が起こり、母性の否定的な項目に、肯定的な項目が入り込むことは先に述べた。本論文では、文脈の流れを理解しやすくするためにこれを父親の「母性の否定的側面」と定義したが、見方を変えると、父親の「さらに過激な母性の肯定的表現」とも捉えることが可能ではないだろうか。もし、そう捉えるとしたら、父親に「母性の否定的側面」は見られないことになる。

父親は、生物学的基礎を持たないために、真の母性を持たないかもしれない。しかし、現代は父親にも母親的な関わりが求められる時代である。その時代の要請に応じて、父親は、母性を創造しようとしているのではないだろうか。それは、理想化された「幻想の母性」とも言うべき母性である。それは、「呑み込むような」とか「過干渉の」といった客観的に見れば否定的な側面を内包している。しかし逆説的に、生物学的基礎を持たない母性であるがゆえに受け入れられ、子どもの「父性イメージ」「母性イメージ」の内在化に影響を与えるのである。一方、母親のMONは真の否定的側面である。それは、生物学的基礎を持ち、男性にはそのまま取り入れることはできない。そして、否定的な側面であるので理想化して取り入れることもしない。したがって、子どもの「父性イメージ」「母性イメージ」の内在化には影響を与えないのである。つまり、母親のMONこそが、理想化して取り入れることも出来ない、男性にとってのブラック・ボックスといえる。

ここで、何故、生徒の「父性イメージ」が内在化されにくいのだろうか。という本項の最初に述べた問題を両親の影響という観点から考えると、次のようなことがいえる。Table 4をみると、高校生の「父性イメージ（FAP、FAN）」に影響を与える両親の「自分イメージ」は、主に父親のFAPとMON、そして母親のFAPとFANとMOPである。そして、Table 3-2の結果を見ると、父親のFAPと、母親のMOPを除く全ての因子が軒並み低くなっている。これは、先にも述べたような「父親が父性を発揮すれば、子どもに父性が内在化する」というような画一的な考え方が浸透してしまった結果であるとも考えられる。S. Freudがエディプス・コンプレックスの概念を確立した時期のウィーンや、日本の戦前の家父長制時代の一般的な考え方として、母親は家庭にいることが当然であった。

その時代の母親は、日常の子どもとの関わりにおいて、意識することなく、父性と母性を両方発揮していたかもしれないということは、充

分に考えられる事である。現代は、女性も社会進出を果たし、母親が意識しなくとも父性と母性を両方発揮している時代ではない。そんな時代だからこそ、父親と母親が、自分の中にある父性と母性を充分に見つめる必要があるといえる。

＜総合的考察＞

以上の事を総合して、目的の項で述べた仮説を検証すると次のようなことが言えるだろう。

＜仮説１＞父性と母性は、男性、女性の区別なく両方が存在している。

この仮説は、本論文においては充分に証明することができなかった。母親には、父性・母性のイメージが内在化しているといえるが、父親にはイメージの混乱が見られた。しかし、筆者としてはそれをネガティブなこととしては捉えていない。それは父親が、価値観が混乱する現代の子育ての中で、試行錯誤しながら獲得した父性・母性であると考えている。母親の父性・母性が確立しているのに対して、父親は柔軟に対応する必要がある。したがって、その父性・母性も表層的であるからこそ逆に良い、ということもあるのではないだろうか。

＜仮説２＞被検者の父が父性を発揮し、被検者の母が母性を発揮したほうが、その被検者にとって理想的なかたちで、父性と母性が内在化される。

この仮説は本論文においては否定されている。重要なのは、父親と母親の協力であり、ステレオタイプな「父親は厳しく、母親は優しい」というような子育てでは、父性と母性が充分内在化するとはいえないようである。

＜仮説３＞被検者の持つ「父性イメージ」「母性イメージ」は、被検者の父母の「自分イメージ」の影響を受けている。

この仮説は充分に証明されたと言えるだろう。ただし、それは「父親の肯定的な父性が、子どもの肯定的な父性に影響を与える」という一対一の対応をするものではなく、それは父親・母親の全存在が影響を与えるものであるということに充分留意する必要があるだろう。

【引用文献】

綾部恒雄（1995）：現代の父親 ―その文化人類学的考察―．精神療法，21（5），33－38

越良子・坪田雄二（1991）：母親の育児不安と父親の育児協力との関連．広島大学教育学部紀要第１部，39，181-185

馬場謙一・福島章・小川捷之・山中康裕（編）（1984）：父親の深層．有斐閣ｐ２～3，p19

東山紘久（2002）：母性社会の問題と超自我・自我理想の崩壊 ―父系（権）社会・母性社会日本の歪み ―．京都大学大学院教育学研究科紀要，47，118－133

樋口和彦（1995）：ユング精神分析の現代父親感．精神療法，21（5）423－430

平山聡子（2001）：中学生の精神的健康とその父親の家庭関与との関連：父母評定の一致度からの検討．発達心理学研究，12（2），99－109

河合隼雄（1982）：中空構造日本の深層．中央公論社 p54，p58

河合隼雄（1998）：日本人の心のゆくえ．岩波書店 p113

尾形和男・宮下一博（2000）：父親の協力的関わりと子どもの共感性および父親の自我同一性 ―家族機能も含めた検討―．家族心理学研究，14（1），15－27

田中佑子・中澤潤・中澤小百合（1996）：父親の不在が母親の心理的ストレスに及ぼす影響 ―単身赴任と帯同赴任の比較―．教育心理学研究，44，156－165

吉田圭吾（1995）：治療者における母性と父性　治療者の個性と技法選択を巡って．心理臨床学研究，12（4），308－321

【参考文献】

A,ミッチャーリヒ（小見山実訳）(1972)（原著1965）：父親なき社会．新泉社
柏木恵子（編）（1993）：父親の発達心理学　父性の現在とその周辺．川島書店
河合隼雄（1976）：母性社会日本の病理．中央公論社
正高信男（2002）：父親力　母子密着型子育てからの脱出．中公新書
土井健郎（1971）：甘えの構造．弘文堂

＜謝　辞＞

本稿は、修士論文（2002年12月）をもとに、加筆修正したものです。本論文の作成にあたり、質問紙調査を快く引き受けてくださいました被験者の方々、さらに、多くの助言と示唆を与えてくださいました、東山弘子先生に心よりの御礼を申し上げます。